

外国語学部における英語教育改善の歩み（2）

——平成14年度実施 短期的計画での実験的指導——

竹 蓋 幸 生

草ヶ谷 順 子

与那覇 信 恵

1. はじめに

文京学院大学外国語学部では、国際化時代の社会および学生からの強い要望に応えるべく、「実用になる英語コミュニケーション能力の養成」を目指して、「TOEIC 800点は夢ではない」を標語に、種々の方向から鋭意英語教育の効果を高める努力をしている。その一つが、文京語学教育研究センター（兼外国語学部英語力向上対策委員会）を中心に三ラウンド・システム（3R：竹蓋，1997；竹蓋他，2001）に基づいた独自の教材を制作しながら推進している「CALLによる英語基礎力の養成」である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「3Rに基づいたCALL教材を使用するクラス」と「使用しないクラス」をそれぞれ実験群、統制群とし、1年間の通常の英語授業の後、指導効果を種々の方向から相対的に比較、観察し、3Rによる指導効果を検証することである。

3. 実験的指導の方法

本学部では平成13年度の英語担当教員の会議で、平成14年度から能力別クラス編成を採用することが決定された（竹蓋他，2003a）。「上級クラス」2クラスと「普通クラス」8クラスの2編成である。実験的指導は、3Rでの指導経験がある教員が不足していたため、上級クラス2クラスのうち1クラスに対してのみ実施することとした。

3-1. 被験者

実験群	外国語学部	平成14年度1年生	1クラス	14名
統制群	外国語学部	平成14年度1年生	9クラス	88名

平成14年度在籍学生数は実験群18名、統制群159名であるが、上記の学生数は本報告のデータとして使用した、評価のための3回のTOEIC-IPテスト（プリテスト、中間テスト、ポストテスト）をすべて受験した学生の人数である。

3-2. 使用教材

本学部1年生は、「Communicative English」を2コマと、「Reading」, 「Writing」, 「LL」1コマずつの、計5コマの必修科目を毎週受講する。実験群はこのうちの Communicative English の1コマで以下に示した CALL 教材による学習を行ったのに対して、統制群はそのコマで CALL 教材を使用しない授業を受講した。本研究は、トータル5コマの授業の効果を測定することが主目的ではなく、実験群と統制群の使用した教材の違いによる指導効果の相対的な「差」の観察が目的であるので他の4コマの授業の教材はここにはリストしない。しかし、いずれの授業でも大学の存続をかけて各担当教員が全力で指導を行った。

実験群：CALL 教材 Listen to Me! シリーズ* *Introduction to College Life* (竹蓋(監), 2002a), *College Life* (竹蓋(監), 2001c), *People Talk* (竹蓋(監), 1999b) の一部

統制群：音声テープ付き教材, *New Interchange 2* (Richards, 1997)

(* Listen to Me! シリーズの教材はいずれもコースウェア化されており、教材の中に 3R に基づいた指導法も組み込まれているので、統制群の使用した教材とは本質的に異なる)

3-3. 指導時間 (期間)

実験群、統制群ともに通常の授業 (80分授業×13週×2期：なお、授業での CALL による学習は80分中、40分～50分であった) の中で指導を行った。指導期間はプリテストの行われた平成14年6月上旬からポストテストの行われた平成15年5月下旬までの約1年であった。ただし、この間には約2ヶ月の夏期休暇、約2週間の冬期休暇、約3ヶ月の春期休暇も含まれるので、実質的には約6ヶ月半の指導ということになる。

実験群の CALL での学習は、授業時間以外に毎週1時間自習するよう勧めた。さらに夏期、冬期、春期休暇中には毎日1時間自習するよう勧めた。しかし初めての試みであり、強制も検閲もしなかったため、指示どおりに実行できた学生はほとんどいなかった。他のクラスでの宿題の多さ、クラブ活動で時間を取られることなどがその理由であった。

3-4. 評価方法

本学部では毎年2回、前期 (5月末または6月初旬) と後期 (11月) に客観テスト (TOEIC-IP) を実施しているが、このうち平成14年度前期に実施の TOEIC-IP をプリテスト、同年度後期のものを中間テスト、翌15年度前期のものをポストテストとした。本研究ではこれらのテストスコアの「上昇量の差」を観測することで実験群と統制群の比較を行い、実験群での指導の効果を検証した。さらに、実験群には Equal-appearing Intervals 方式と自由筆記方式による学習者の印象に基づいた主観的評価も加えて実施し、効果の検証をより幅広く行った。

4. 結果とその解釈

実験群 (experimental group : EG) と統制群 (control group : CG) に対する指導の結果

は表-1にまとめて示した。図-1は、表-1のクラス別年間上昇量の欄を視覚的に見やすく表示したものである。

表-1 クラス別 TOEIC-IP スコアの変遷と年間上昇量

クラス	プリテスト H14前期	中間テスト H14後期	ポストテスト H15前期	年間 上昇量
EG1	493.2	515.0	593.6	100.4
CG1	473.6	471.4	521.1	47.5
CG2	357.5	356.3	406.9	49.4
CG3	365.0	353.3	404.2	39.2
CG4	371.3	372.5	371.3	0.0
CG5	318.5	345.0	350.0	31.5
CG6	336.4	349.5	385.5	49.1
CG7	349.0	352.0	361.0	12.0
CG8	366.5	360.0	375.4	8.8
CG9	375.4	341.7	388.8	13.3
実験群 平均	493.2	515.0	593.6	100.4
統制群 平均	372.8	371.1	401.8	28.9

* 表中のデータには、計算上まるめの誤差が含まれている。

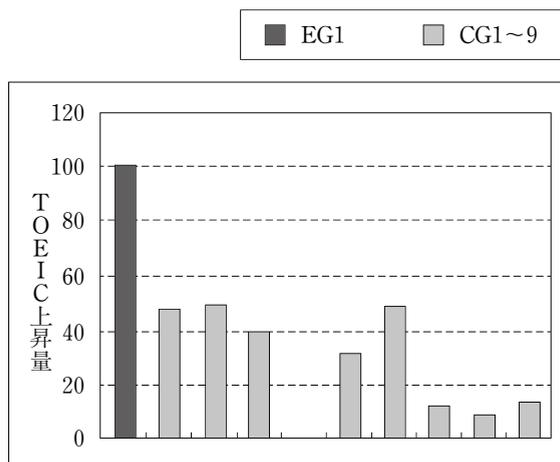


図-1 クラス別 TOEIC-IP スコア年間上昇量

次に、統制群9クラス（CG1～CG9）の上昇量の平均値を求めた上で実験群（EG1）と統制群全体の平均上昇量を比較表示したものが図-2である。左側の「全員」と書かれた棒グラフは実験群、統制群ともに3回のテストを受験した学生全員（14名：88名）の上昇量の平均値で、中央の「400点以上」のグラフは、両群ともプリテストで400点以上であった学生（13名：35名）の上昇量の平均値である。また、右側の「450点以上」のグラフは同じく両群ともプリテストで450点以上であった学生（12名：13名）の上昇量の平均値である。中央欄、右欄で400点以上、450点以上のレベルに絞っての平均値の比較を試みたのは、TOEICの場合、400～450以上のスコアが「安定した指標」と見なせると言われているからである（TOEIC運営委員会，2002b；他）。

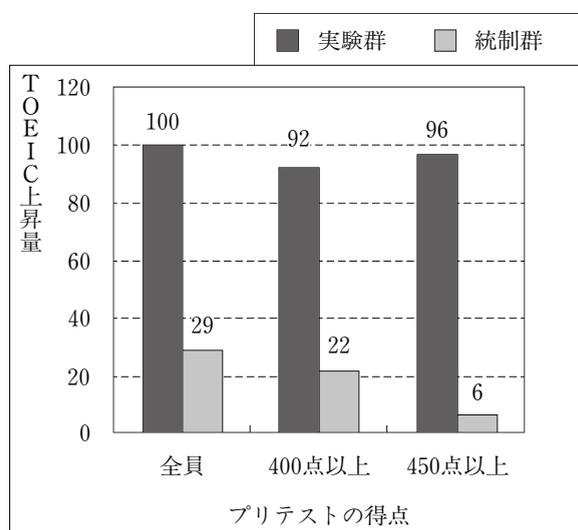


図-2 三種のスコアレンジでの実験群と統制群の比較

図-2の三種の比較を統計的に検定した結果をまとめたものが表-2である。いずれの場合もその差は統計的に優位な差であることが検証され、同じ授業コマ数で学習しながら実験群は「全員」の比較で統制群の約3.5倍、「400点以上」の場合で4.2倍であった。ここで注目すべき事実は、TOEIC運営委員会によりTOEIC Bridge（TOEICへの架け橋として開発された初中級者のためのテスト）でなくTOEICの受験が勧められているレベルの「450以上」の場合になると、その差が15.5倍に及ぶことが明らかになったことである。

表-2 TOEIC-IP スコアの上昇量とその統計的検定結果

	全員	400点以上	450点以上
実験群	100.4	91.9	96.3
統制群	28.9	21.7	6.2
両群の差	71.5	70.2	90.1
t-test	3.67*	3.23*	3.21*

* 有意差あり (p<.01)

次に、図-3 と図-4 には実験群学生全員の個別の学習効果を棒グラフで表示した。前者は上昇量のみを学習者別に図示したもので、後者はプリテストのスコアと上昇量、それに到達点のすべてが一度に展望できる形にしたものである。図-3 から、教師、指導法、そして教材が同じでも、被験者を個別に見ると効果には大きなバラつきが出ることがわかる。また同時に、大きなバラつきはあるものの、実験群には「スコアを下降させた者はいなかった」事実も読み取れる。そして図-4 からは、実験群の場合、「学習前の習熟度レベル (TOEIC 375~650)」に違いがあっても上昇量が大きく変わることはないことが読み取れる。

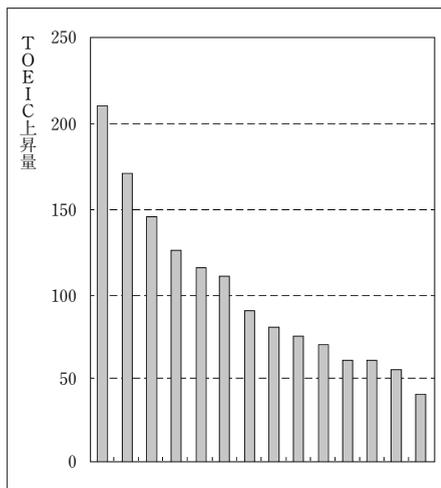


図-3 個別に観察した実験群学生のスコア上昇量(1)

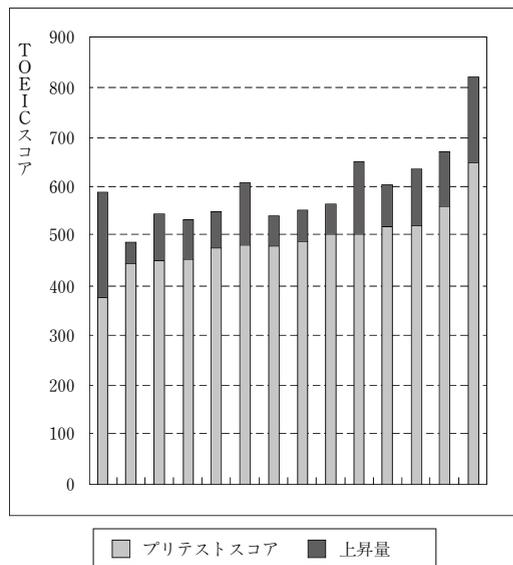


図-4 個別に観察した実験群学生のスコア上昇量(2)

図-5には、本年度の指導で「最高得点」を記録した学生と「上昇量がもっとも大きかった」学生の変動の軌跡を折れ線グラフで示した。最高得点獲得者は、TOEIC 650という決して低くないレベルから出発して1年の学習で820にまでスコアを上昇させた。

「TOEICのスコアが安定している」と言われるレンジ（400以上，450以上）のデータのみを比較すると，実験群と統制群の成績の差が全員の前での比較の場合よりも大きく開いている（図-2参照）。一方，プレテストのスコアが「450未満」，「450～550」，「551以上」の学生という基準で実験群，統制群，両群を下位群（2名：75名），中位群（10名：11名），上位群（2名：2名）の3群ずつに分類してスコアの上昇量を比較した。その結果，この比較でも実験群の場合はすべての群で87.5～140点と大きく上昇させているのに対して，統制群の場合はプレテストのスコアが上がるにしたがって明らかに上昇量が減り，551点以上であった上位群は「-37.5」点と，大きく下降してしまったことが明らかになった（図-6参照）。

続いて，3Rの指導が英語の「総合力を養成」できるのか，または特定の技能の養成に限定されているのかを観察した（図-7参照）。使用されたデータはTOEIC-IPのなかのListening SectionとReading Sectionのセクションスコアである。実験群で使われたCALL教材は，竹蓋の三ラウンド・システムの理論の中では「狭義の3R（中核システム）」と呼ばれ，主に聴解力を効率的に養成する目的で作られた教材であるから，当然リスニングのスコアは大きく

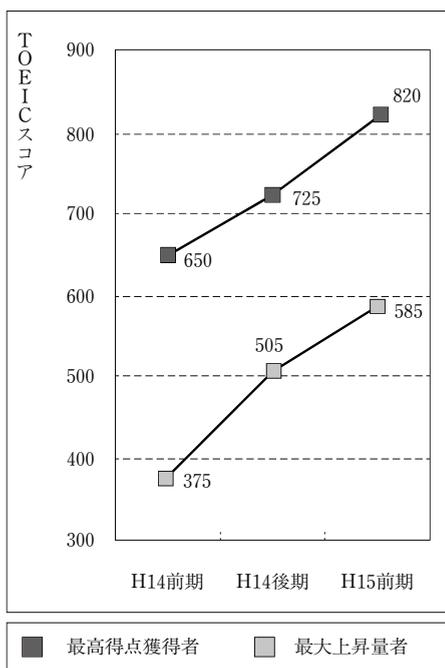


図-5 実験群の最高得点獲得者と最大上昇量獲得者のスコアの軌跡

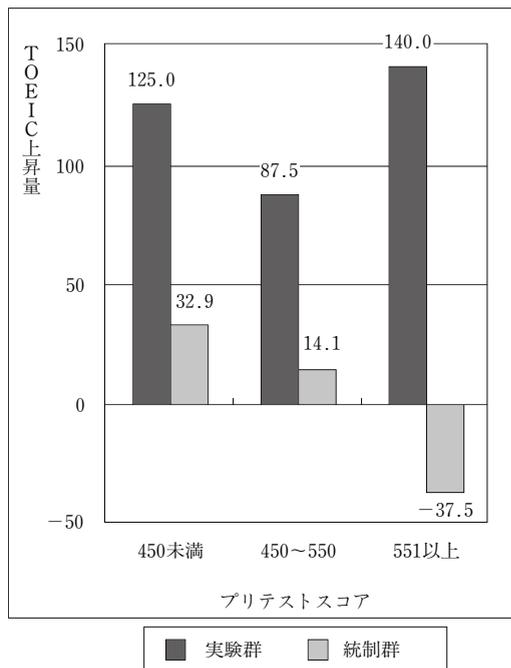


図-6 プリテストのスコア別に見た指導効果 (TOEIC-IP 年間上昇量)

上昇している。しかし注目すべきことは、リーディングのセクションスコアにもリスニングスコアの上昇量の85%と、同量に近い上昇があったことである。これは、リスニングの指導からリーディング力向上への転移 (Transfer) があったためと推定される。統制群ではリスニングの上昇も23と少なかったが、リーディングの上昇も6と、リスニング上昇量のわずか26%に過ぎず、転移がほとんどなかったと推定される。

実験群、統制群が共にそれぞれの学習法で年間を通して学習を行ったため、「前期のTOEICスコア上昇量」と「後期のスコア上昇量」を比較することもできた (図-8 参照)。比較は、それぞれの群の学生を前期のスコア上昇量を基準に上位群 (5名:29名)、中位群 (4名:30名)、下位群 (5名:29名) に3分割し、それぞれのグループの平均上昇量が前期と後期でどのように変動したかを観察したものである。まず、統制群の前期と後期のスコアの変動が興味深い傾向を明確に見せてくれた。

観察された傾向は、「初回の学習機会に上昇が顕著に大きいと、次回の学習機会には逆に上昇が少なくなる」、そして「初回の学習機会に上昇が少ない、あるいはマイナスだと次回の学習機会の上昇は大幅に大きくなる」ことである。当然、「最初に上昇量が平均的だった者は、後期の上昇量もほぼ平均に近い」ということになる。このデータから学べることは、言語の学習の場合、学習者の知力の問題よりも、学習者の「慢心や安心」という学習効果へのマイナスの影響と、「反省心、やる気」の及ぼすプラスの影響がはるかに大きいということである。

次に、図-8で実験群と統制群を比較してみるとさらに興味深いことが見えてくる。それは、統制群には前期の上昇量で見た上位群に後期の大きな落ち込み ($-70 = -7 - 63$) があるのに、実験群の上位群には無視できる程度の落ち込み ($-12 = 65 - 77$) しかなかったことである。また、中位群の上昇で見ても、統制群の伸び ($41 = 39 - (-2)$) と比較すると、実験群にはその2倍近い伸び ($75 = 88 - 13$) があった。このことは、実験群の教材の基礎理論である三ラウンド・システムがどのレベルでも高い学習効果を引き出せるものであるだけでなく、「学習意欲を持続させる力」も強いものであることの証と言えるであろう。

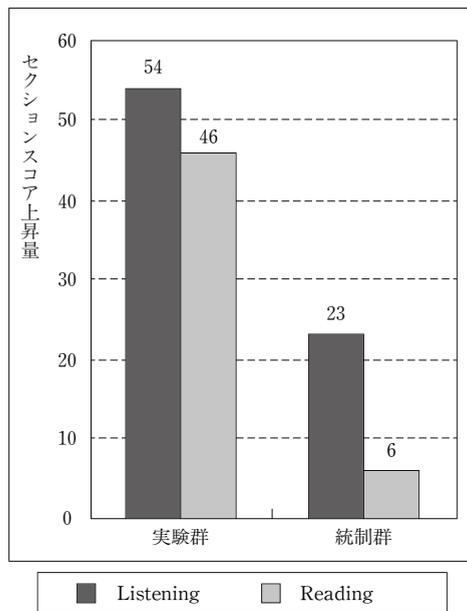
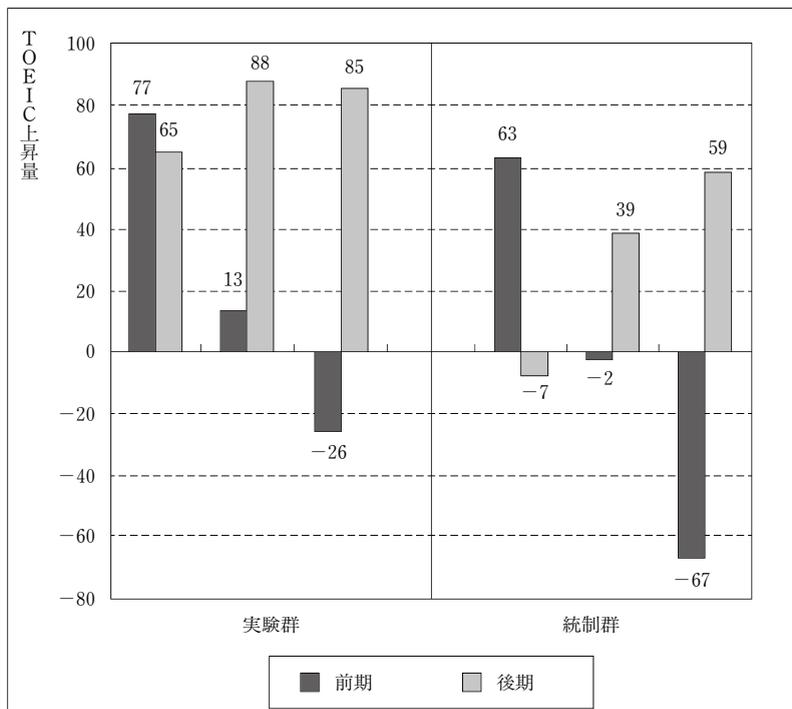


図-7 TOEIC-IP セクション別スコア上昇量



(実験群, 統制群とも左欄が上昇量の上位群, 中央が中位群, 右欄が下位群)

図-8 二期連続学習におけるスコア上昇量の変動

5. TOEIC-IP の信頼性

前出の表-1を見ると、本年の外国語学部生の前期の学習成果と後期の学習成果に通常では考えにくい大きな開きのあることがわかる。実験群、統制群、共にである。このような結果になった原因を探るため、また、結果の解釈に正確を期すため、評価に使用した TOEIC-IP の信頼性（安定性）について調査を行うこととした。Childs（2002）らも TOEIC のスコアに揺れがあることは指摘している。

5-1. データの観察

文京学院短期大学には、我々の調査した平成9年度以来、232名を底にして、毎年前期と後期にそれ以上の人数の TOEIC-IP 受験者がある。したがって、TOEIC-IP が信頼性の高いテストであれば、全員の平均点には毎年それほど大きな変動は見られないだろうということを前提として、短大生の TOEIC-IP における平均スコアの変遷を観察した。その結果、以下のような興味深い実態が見えてきた。

- (1) 毎年、前期実施テストの成績が比較的高く、後期実施テストの成績が低いという、表-3に見られるような、ほぼ規則的な波状の上下動傾向がある。

表-3 文京学院短期大学学生全員の TOEIC-IP スコアにおける
学期ごとの平均得点変動の軌跡

	前期スコア	後期スコア	前期と後期の 得点差	後期から次年度前期 までの上昇量
平成9年	357	341	-16	1
平成10年	342	339	-3	23
平成11年	362	329	-33	7
平成12年	336	304	-32	19
平成13年	323	—	—	—
平均	344	328	-21	13

- (2) 上記(1)の傾向は、本学短大生の場合、後期が初めての TOEIC 受験であり、翌年前期が2回目の受験であるため、前期のスコアには「学習効果」とともに受験慣れの「練習効果」も含まれるためと考えられ、予想されうることであった。しかし、この他に短大生の TOEIC-IP のスコアには、図-9に見られるような、例年の波状のパターンを乱す「不安定な揺れ」がところどころに観察された（表-3のデータから予測される揺れは破線で示したので、それと実線で示した実際の得点パターンを見ると不安定な揺れが観察できる）。

さらに外国語学部と短期大学の学生を含めた最近のデータでは以下のような事実も観測されている。

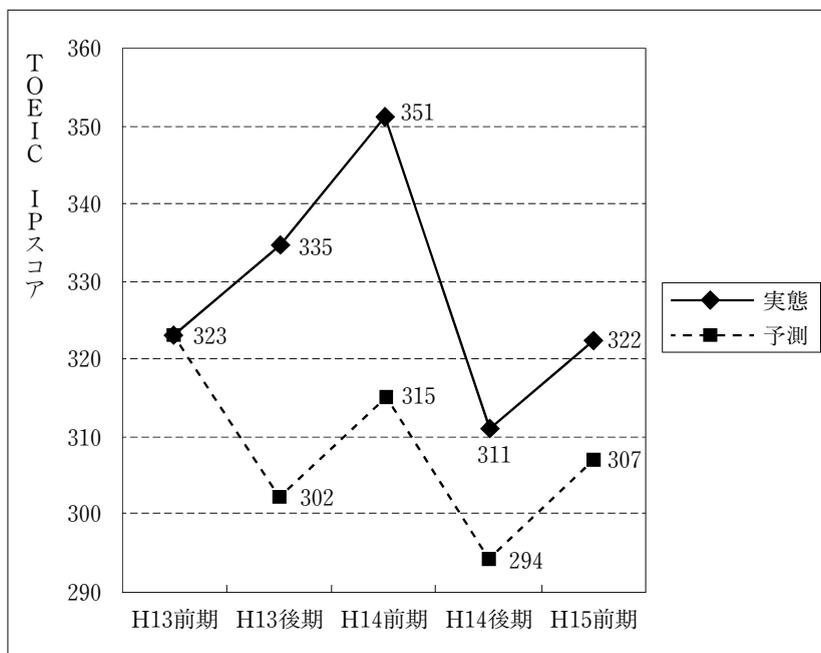


図-9 短期大学学生の TOEIC-IP における最近 2 年間の平均スコアの変動（実線）と表-3 のデータから予測されたスコアの変動（破線）

- (3) 「平成14年10月」と「平成14年11月」の TOEIC-IP テストを両方受験した学生で前者のスコアが400点以上の学生が6名おり、その得点を比較したところ、前者の平均スコアの方が約37点（ $=668.3-631.7$ ）高かった（図-10左）。
- (4) 「平成14年11月」と「平成14年12月」に行われた TOEIC-IP のテストを両方受験した学生で、後者のスコアが400点以上であった学生は16名で、そのスコアを比較したところ、後者の平均スコアが約79点（ $=565.3-486.3$ ）高かった（図-10右）。

5-2. 考察

観察された(2)～(4)のデータから、総合的な英語力を測定する方法の1つとして多くの企業や教育機関で受け入れられている TOEIC-IP ではあるが、そのスコアの安定性にはある程度の揺れを覚悟する必要があることが推定された。しかし、(3)、(4)での比較から推定される「平成14年度後期のテストが、少なくともその前後のテストと較べて、約58点（ $= (36.7+79.1) \div 2$ ）難しかった可能性」については今回の指導効果の解釈に大きな影響はない。そのテストが今回の実験的指導計画の中では中間テストという位置づけに過ぎないからである。

ただし、(2)で述べた不安定な揺れのうち最近観測されたものでは、とくに平成14年度前期実施のテストの難易度が大きく低かった可能性を示し、今回の「実験的指導の効果」に関するデータの検証にあたって無視できない意味を持つ。そこで、そのことについてここで簡単に触れておきたい。

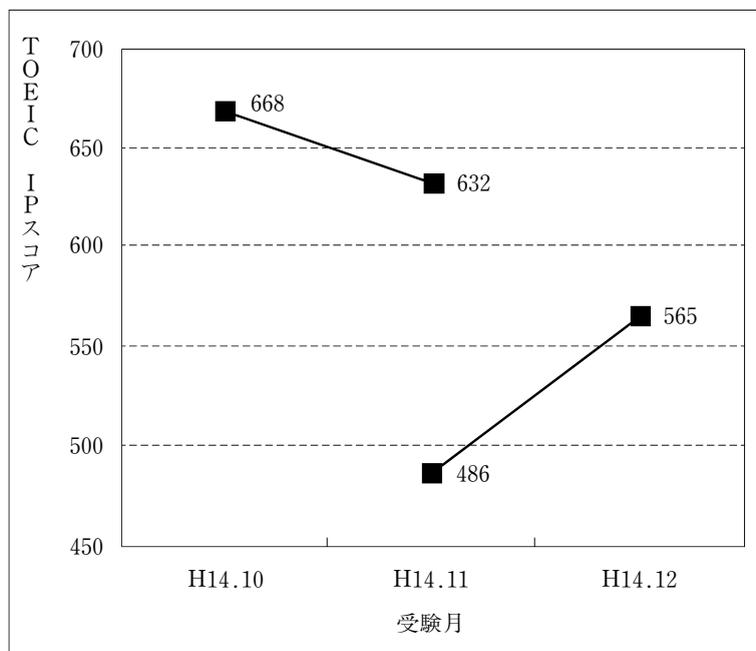


図-10 同一学生群が1ヶ月の間隔でTOEIC-IPを連続受験した結果の平均得点の変動

図-9で観測された最近の不安定な揺れは、平成13年度前期から平成15年度前期の2年間の間に見られたもので、平成13年度後期に前後のスコアよりも低く出る傾向が見られるはずである短大生のスコアが平成13年度前期より逆に上がっており(323→335)、続く翌年前期にもさらに上がっている(335→351)という事実がある。このことから、まず平成14年度前期のテストは28点(=351-323)ほど難易度が低かったことが推定される。このことを裏付けるように平成13年度前期の平均値が323で、2年後の平成15年度前期の平均値も322でほぼ同じであるのに、その中間の平成14年度前期の平均値は30近く高い351であった。したがって、こちらのデータからも平成14年度前期のテストは約29点(=351-322)難易度が低かったことが推定される。これらのデータから「実験群のプリテスト」として使われた平成14年度前期のテストは「ポストテスト」として使われた平成15年度前期のテストより $28.5 (= (29+28)/2)$ だけ難易度が低かったことが推定されることになる。つまりこのテストをプリテストとした場合、「上昇量がそれだけ実際より少なく出た可能性がある」ということである。

この推測を裏付けるデータが外国語学部生のデータの中にも存在する。それは、TOEICスコアで学部全体の年間上昇量を平成13年度分と14年度分とで比較したところ、前者の場合、150点以上上昇した学生が19名(全体の5.2%)いたが、後者の場合14名(全体の2.9%)に過ぎなかった。そこで、14年度分のデータで、上昇量の上位5.2%にあたる上位25名の学生の平均上昇量を計算したところ、116点であった。したがって、このデータからは、平成14年度は

13年度に比べて、プリテストとされた TOEIC-IP が約34点（=150-116）難易度が低かったためにそれだけ上昇量が低く出たと推定される。

短大生と学部生のデータを観察した上記2セットのデータから、平成14年度に文京学院大学で学習し、TOEIC-IPを受験した学生のスコア上昇量（指導効果）には全員に平均30.3点（=（34+29+28）/3）の上乗せをすることが妥当であろうと結論することができる。そこで、実験群と統制群の上昇量に両者とも30.3点を加えると、本年度の文京学院大学外国語学部生の TOEIC での真の得点上昇量は、実は、それぞれ130.7点と58.2点であったことが推定される。

興味深いことに、この30.3の補正をせずに元データに現れたスコアだけで前期と後期の比較をしてみると本年度の外国語学部生全体の学習効果が1.4対37.3で説明のつかない大きな開きがあるが、補正值分だけプリテストの得点が低かったはずと考えて計算すると、前期の上昇量が現状の1.4から31.7となって後期の上昇量37.3に近くなり、同じ期間の学習の成果であることが受け入れ易くなる。上記5-1項での観察の(3)と(4)から中間テストが難しすぎた可能性も示唆されているので、その分も補正されれば前期と後期の学習成果の大きさがさらに近いものとなり、補正の必要、正しさがより鮮明に検証されるであろう。

6. まとめ

「文京女子大学（旧校名）外国語学部英語教育改善計画」のうち、「短期的計画」分の1年を通した指導実験の結果がでた。それは、習熟度別クラス編成による指導の中で、平成14年度入学生10クラスのうち1クラスを実験群、残りの9クラスを統制群と見なして1年間の指導の効果を比較したものである。実験群の平均点は、TOEIC-IPのスコアで、493.2から593.6に上昇し、年間100.4の上昇が記録された（この値は TOEIC の得点の安定性に対する補正を行っていないものである。以下同様）。このうち、もっとも上昇量の大きかった学生は375から585へと210の上昇を記録し、最高到達点では650から出発した学生が820へと上昇した（図-5参照）。「TOEIC 800点は夢ではない」をキャッチフレーズにスタートした外国語学部であったが、この学生は入学後1年間でそれを達成したことになる。統制群88名の場合は、全体平均で年間28.9の上昇であり、最大上昇量は230、最高到達点は650であった。

統制群を基準とした実験群での指導効率は約3.5倍（=100.4/28.9）だったことになるが、これよりさらに重要と思われる指導効果のデータは、実験群と統制群の学習成果を TOEIC のスコアが安定していると言われる450点以上の場合に限って比較したところで観察された。この場合、実験群には96.3の上昇があったにもかかわらず、統制群には6.2の上昇しかなく、約16倍の効率差が確認された。さらに、実験群と統制群の TOEIC-IP スコアをどちらも450未満の下位群、450以上550以下の中位群、それに551以上の上位群とに3分割して比較観察したところ、そのいずれでも実験群には大きな上昇があったのであるが、統制群の場合はスコアが高くなるほど上昇量が急激に減り、551以上の上位群では-37.5という大きな下降が観察された。伝統的な指導法では実用レベルへの養成が難しいことを実証する結果と言えよう。

続いて、リーディングセクションのスコアにリスニングの85%分の上昇が見られたことから、3RのCALLによる指導が単一技能の養成だけでなく、総合力養成に大きく貢献することも明らかにされた。

最後に、連続的に長期間指導（学習）を続ける際の留意点を探るため、実験群と統制群をそれぞれ、前期分の学習成果（スコア上昇量）で、上位群、中位群、下位群に等分割し、それぞれのグループの学生の後期の学習成果を観察した。この結果、二点の事実が明らかになった。一つは、一般的に前半に高い成果が出ると後半は下がり、前半に成果が出ないと後半は頑張るという明らかな傾向があるということであるが、もう一つは三ラウンド・システムによる指導の場合はその傾向の望ましくない部分を大きく改善できるということである。

さらに、ここで忘れてならないもう一つの実験的指導の効果は、実験群の学生全員が大きなやる気の向上を見せ始めたことであろう。表-4と表-5に指導終了時に行った Equal-appearing Intervals 法および自由筆記によるアンケート調査の結果を示す。

表-4 実験群学生のアンケート項目への回答の割合

アンケート項目	肯定	中間	否定
Listen to Me!で学習をして聞き取り力がついたと思う	92(%)	8	0
別の Listen to Me!シリーズの教材でも学習したい	100	0	0
この授業をとってよかった	100	0	0

表-5 自由筆記のアンケート回答の一例（実験群学生 K）

このA組にいると、「800点以上になれる可能性はゼロじゃないんだ」と思いました。大学に入って何も結果を出さずに卒業していくのは嫌なので、TOEICのスコアを上げていくことに努力したいです。わからないことがあったら先生のところにいきますのでその時はよろしくお願ひします。

全体として、千葉大学で繰り返し検証されてきた三ラウンド・システムによる指導の高い効果（竹蓋順子，2000）が文京学院大学でも実現できることが確認されたと言えるが、最後に今回の実験的指導の副産物として判明したことを付け加えてこの報告を締めくくりたい。それは、TOEICのような信頼性が高いとされるテストでも時としてそのスコアには揺れが見られ、学習者の実際の実力とは異なるスコアの出ることがあるということである。このため、1回の受験結果であまり一喜一憂せず、最低1年は学習を継続して数回のテストを受け、その平均点を自分の実力と考えるくらいの余裕が必要ということである。

10年近くにわたる本学のTOEIC-IPのデータを詳細に検討した結果、今回の1年間の指導効果の判定についても多少の補正が必要であると結論せざるを得ないことが判明した。そこで、

複数の方向からデータを収集，比較して推定された補正值を含めた上で我々の指導効果を測定したところ，実験群には TOEIC 約130点，統制群にも約60点の上昇があったと推定された。

TOEIC-IP のスコアにこのような揺れがあっても今回の報告にまとめた検証結果の結論には大きな影響はないと我々は考える。それは実験群も統制群もまったく同じテストを受験しており，そのデータに基づいた相対的な比較が本報告の中心だからである。

また，今回の検証ではとくに効果の出ない可能性の高いクラスを統制群に選んだのではないことを明らかにするために，実験群以外のクラス全てを統制群とみなして効果の比較，検証を行った。しかし，学習開始時にほぼ TOEIC の平均スコアが同レベルであったもう 1 クラスの 14名のみを統制群として比較しても結論部分の大枠での傾向にはまったく違いがないことを確認している（竹蓋，2004予定）。

なお，本年度は当初の計画での中期的計画に入り，2 年次の学生を対象に昨年度に引き続き指導を行っている。本学外国語学部での長期にわたる継続的指導の効果，問題点が明らかにされ，英語教育の改善に繋がれることが期待される。

参考文献

- Childs, Marshall R. (2002) 'What you can expect from TOEIC preparation,' *The Daily Yomiuri*, October 18, 18
- Nation, I.S.P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary*, Heinle&Heinle Publishers, Boston
- Richards, Jack (1997) *New Interchange 2*, Cambridge University Press
- 高橋秀夫他 (2001) 英語 CALL 教材の高度化の研究, 『言語文化論叢』, 9: 1-22
- 竹蓋順子 (2000) 大学英語教育システムにおける複合システムの実践的研究, 『言語行動の研究』, 7 増: 1-59
- 竹蓋順子, 竹蓋幸生, 高橋秀夫, 土肥充 (2002) 英語総合力養成のための CALL 教材の開発とその試用: 科学研究費補助金による研究, 『ARELE』, 13: 199-208
- 竹蓋幸生 (1997) 『英語教育の科学』, アルク, 東京
- 竹蓋幸生 (2001) 研究トピックス: "IT" 時代の英語教育, 『ニューズレター高等教育とマルチメディア』, 4, 特定領域研究 (A) 「高等教育に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」(領域 120) : 8-22
- 竹蓋幸生監修 (1999a) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *College Lectures*, メディア教育開発センター, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (1999b) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *People Talk*, メディア教育開発センター, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (2000a) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *TV-News*, メディア教育開発センター, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (2000b) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *Movie Time 1*, メディア教育開発センター, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (2000c) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *Movie Time 2*, メディア教育開発センター, 千葉
- 竹蓋幸生他 (2001a) 英語 CALL 教材の高度化の研究, 特定領域研究 (A) 高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究, 『平成12年度計画研究 研究成果報告書』(坂元昂) : 159-

- 竹蓋幸生監修 (2001b) CALL 教材シリーズ英語初級, Listen to Me! *First Listening*, 千葉大学, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (2001c) CALL 教材シリーズ英語中上級, Listen to Me! *College Life*, 千葉大学, 千葉
- 竹蓋幸生監修 (2002a) CALL 教材シリーズ英語初中級, Listen to Me! *Introduction to College Life*, 千葉大学・文京学院大学
- 竹蓋幸生他 (2002b) 新しい英語教育 三ラウンド・システム, 『文京学院大学外国語学部, 文京学院短期大学紀要』, 1: 1-14
- 竹蓋幸生監修 (2002c) 外国語 CALL 教材の高度化の研究, 特定領域研究(A) 高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究, 『平成13年度計画研究 研究成果報告書』(坂元昂), 241-269
- 竹蓋幸生他 (2003a) 外国語学部における英語教育改善の歩み, 『文京学院大学外国語学部, 文京学院短期大学紀要』, 2: 1-13
- 竹蓋幸生監修 (2003b) CALL 教材シリーズ英語上級, Listen to Me! *College Life II*, 千葉大学・文京学院大学
- 竹蓋幸生 (2004予定) 英語学と英語教育, 『石黒昭博先生記念論文集』
- 土肥充他 (2002) 多様なレベルの学習者に対応した英語 CALL 教材の開発, 特定領域研究(A) 高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究, 平成13年度計画研究 『研究成果報告書』(坂元昂): 256-258
- TOEIC 運営委員会 (1995) Q7, 『TOEIC Q and A』(TOEIC 説明会で配付された印刷資料)
- TOEIC 運営委員会 (1996) 『スコア・マニュアル Score Recipients' Manual』, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, 東京
- TOEIC 運営委員会 (2002a) 『TOEIC テスト2001 DATA & ANALYSIS - 2001年度受験者数と平均スコア』, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, 東京
- TOEIC 運営委員会 (2002b) 『TOEIC Bridge Newsletter』, No.1 March, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, 東京

謝 辞

本研究で使用された CD-ROM 教材 (Listen to Me! シリーズの *Introduction to College Life* 及び *College Life*) は, 科学研究費補助金, 特定領域研究(A) 「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」(領域代表者: 坂元昂) の計画研究カ班「外国語 CALL 教材の高度化の研究」(研究代表者: 竹蓋幸生) の助成を受けて開発されたものである。